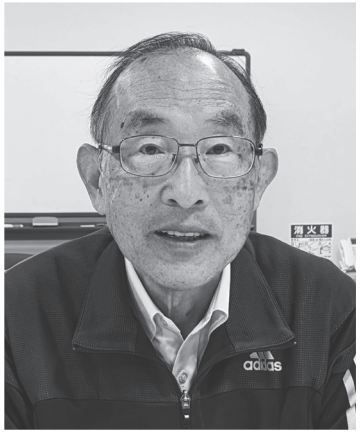
魅力ある図書館づくりに手探りで奮闘の日々

湯浅町立図書館　見矢義夫さん

和歌山市、海南市、有田市、新宮市など近年公立図書館の改築オープンが相次ぐ中、２０２０年10月に改築された、湯浅町立図書館の見矢館長に、新しい図書館の状況、今後の取り組みなどについて3月29日にお話を聞きました。



見矢義夫さん

湯浅駅と繋がる図書館

ＪＲ湯浅駅周辺にあった有田振興局や湯浅町役場が移転し、駅周辺は近年賑わいが無くなってきました。駅前に賑わいを取り戻そうと、２０１５年から湯浅駅周辺等整備基本計画が作られました。

ＪＲ湯浅駅は旧ホームを利用し改札口のみ移転する形でバリアフリー化が進められ、ホームの段差解消や屋根、エレベーターが設置されました。整備の中心となる複合施設「湯浅えき蔵」（１階にはＪＲ湯浅駅改札口、観光交流センター、湯浅商工会、２階は図書館と民間経営の喫茶店、３階は地域交流センターとしてホールや会議室）の建物は外観が醤油蔵をイメージしたものになっていて、一階に駅へのアプローチ道路があり、雨に濡れずに送迎が出来ます。また、津波災害時の避難施設でもあり、地震や津波の場合、震度４以上で、屋上への階段が自動的に開き（パニックオープン）、周辺の方が建物の屋上避難広場に避難できるようになっています。駅前は駐車場や駐輪場、子どもの遊び場（おちゃと公園）を整備し、今年５月には、旧駅舎をリニューアルして食事もできる集いの場としてもオープンします。

湯浅町の図書館の歴史は古く、戦前からあって、何度か移転改築されています。移転前の図書館は旧湯浅郵便局を改装したもので、県立耐久高等学校近くにありました。

今回は「湯浅えき蔵」の２階に移転したのですが、この施設はＪＲ湯浅駅に隣接していて、駅を利用する方が便利に利用できます。例えば伝統的建造物群保存地区などを訪れる観光客の方とか、熊野古道で、海南から藤白峠を越えて湯浅まで来て、電車で帰るという方、そういう人が電車の時間待ちで、ここを利用してくれたりします。

来館者は５倍に、午前９時から午後９時まで開館

「えき蔵図書館」の蔵書数は約５万４千冊で旧図書館から移転して２割ほど増えています。来館者は月平均で１万人（１日３６０人）となり、同じ人が複数回来られるので単純には比較できませんが、ほぼ湯浅町の人口に近い数の方が利用してくれていることになります。旧図書館の来館数が月平均２３００人（１日平均73人）でしたので、約５倍に増えました。

一方本を借りる方は、１日平均37人、貸出しは１３６冊で、２割～３割増となっています。本を貸し出す対象者について、以前は有田郡市内に限定していましたが、移転後は日本国内に広げています。（北海道や東京から来られた方も借りてくれています。）

また、来館者数に比べて貸出冊数が伸び悩んでいること

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2023年 5月号
2023年4月25日発行　第348号　（月300円）

目　次

魅力ある図書館づくりに手探りで奮闘の日々
湯浅町立図書館　見矢　義夫さん…… 1
大塔村の合併検証
どうすれば地域の価値を取り戻せるか、
その議論が今必要な時…… 4
県下各地から⑥
上富田町役場での「仕事」をおえて
淑徳大学地域創生学部教授　中島　正博…… 8

から、読書人口を広げていきたいと考え、「読書記録帳」を作成し活用しています。特に、より多くの子どもたちに読書に興味、関心を持ってもらおうと町内の全児童・生徒に配布しました。この「読書記録帳」は「貯金通帳」と同じように、借りた本が自動的に通帳に記載されることになっていて、励みになるように、一冊終了するごとに記念品を贈呈しています。

　来館者の年齢層は、高齢の方が多く、退職された方や主婦の方が主流となっています。

図書館エントランス

仕事をされている現役の方については、夜９時までの開館で便宜を図っていますが、来館することはなかなか難しいようです。（電車で通勤や通学をされている方にとっては、利便性が高いので利用してくれています。）

　図書館で最も来館者数が多くなる時期として、中学校・高等学校の試験発表期間があげられます。家で勉強するより集中でき能率も上がるし、友達同士で教え合いもできることから、多くの学生が利用してくれます。その期間は、臨時に会議室を開放して対応しています。

　３月初旬、郷土資料コーナーの部屋で鉢巻をして、一心不乱に勉強している人を見かけました。話を聴いてみると、毎日毎日、ここに来て受験勉強に取り組んでいるとのこと。図書館もこのような形で役に立っていると思うと嬉しくなってきました。

　棚にあるポップを貼っている本を手にとって、椅子に座って読書している方、各社の新聞に目を通しておられる方、絵本コーナーで子どもさんに読み聞かせをしているお母さんの姿を見るにつけ、図書館の大切さを再認識させられます。

図書館は本の貸出しだけでなく、滞在型の施設になってきている

　お隣の有田川町は、ＡＬＥＣ（アレック）を中心に「絵本のまち」を前面に打ち出し、絵本作家の講演会を開いたり、大規模な絵本関連のイベントを開催したりしています。海南市のＮＯＢＩＮＯＳ（ノビノス）は、絵本など子ども向けの図書が充実しているようです。また、館内には子どもの遊び場所や託児所、コーヒーショップなども併設されており、憩いの場となっています。和歌山市の図書館も民間で運営されていて、従来の図書館のイメージとは違った形になっています。

　このように、これからの図書館は、本の好きな人が本を借りにくる場所だけでなく、心地よいリラックスできる、滞在型の図書館に向かいつつあると考えています。

　さて、話は「えき蔵図書館」に戻ります。私がここの館長に就任してから、誰もが気楽に利用できる図書館、親しみの持てる図書館、魅力ある図書館にしていきたいと考え、職員の協力を得ながら次のような取り組みを進めてきています。それは、エントランスの空間を利用して季節感あふれる飾り付けや展示を行っていることです。具体的には、先月、節分にちなんで超特大の巻き寿司を作って上から吊るしました。同時に町内の伝統的建造物群保存地区を中心に毎年実施している「ひなめぐり」の会場の一つとして、地域の方々の協力を得て、「七段飾り」のお雛様を展示してもらっています。来月には「五月人形」と「鯉のぼり」を展示する予定にしています。来館した子どもたち、住宅事情で今では自宅に飾ることが出来なくなった「七段飾り」等々を見て楽しんでいます。

　その他には、１月には「お正月飾り」や本物そっくりな「おせち料理」７月には「七夕飾り」等々、各月ごとの行事にちなんだ展示を行って来館の方々に季節感を味わってもらっています。これらについては特技を持った職員を中心にして全員が協力し合って制作しています。

　また、エントランスの壁面を利用しての写真展（シロウオ祭り写真コンクールの優秀作品や町民カレンダーの応募作品、公民館の作品など）やオリンピック等の新聞記事の展示、郷土資料コーナーでの絵画展（小学生の作品等）も展示しています。

　このように、その時々の話題となっている出来事や年中行事について関心を持ってもらおうと、展示を中心にして様々な形で情報提供を行っています。

　図書館には本を借りに来るのだけど、行ったら何か情報を得られる場所であるし、食事やコーヒーを飲める場所であるということで、皆さんが楽しめ、そしてほっこり出来る、そんな場所に出来たらと考えています。

　次に、本来の図書の役割として、資料を提供する場を設けて行くことも重要であると考えます。そのための資料収集については、この図書館に移転した時から行っています。クラウドファンディングを活用した資金で、醤油醸造に関する資料（書籍）を収集していることも一例として挙げられます。これからも利用者の

ニーズを参考にしながら、湯浅に関係した資料も含めて充実を図る必要があると考えています。

図書館の運営や地域とのつながりについて

図書館には、現在13名の職員が勤務しています。館長・係長・正規の職員1名、会計年度任用職員10名、そのうち3名が司書の資格を有しています。

「湯浅えき蔵」向かって右がJR湯浅駅、左の２階が図書館

係長は、事務処理や催しものの企画、書籍の購入、資料の収集等、図書館の運営を円滑に進めるために日々奮闘しています。

他の職員は、貸出・返却業務、図書の整理、環境美化、掲示物の手入れ、館内に飾る作品の制作などの業務を積極的、意欲的に行ってくれています。

本の貸し出しはすべてコンピューターで処理しており、一度に10冊まで借りることが出来ます。また、館内に設置している自動貸出機での貸出も可能なので、それを利用して借りて帰る方もいます。

当館ではＷｉ－Ｆｉ環境が整っていて、持参のスマートフォンでインターネットが利用できるようになっているので、インターネット用のパソコンは、現在のところ置いていません。

また、館内には本の検索機、音声朗読機、拡大読書器、本の消毒器などを設置して来館者の多様なニーズに応えられるようにしています。

視聴覚資料については、サブスクリプションで電子書籍や動画を低額で利用する方が増えてきているので、今のところは所蔵していませんが、電子書籍については導入に向けて検討しているところです。

他の図書館との関係については、県立図書館はもちろんのこと、市町村立図書館相互の貸し借りが可能となっており、その点での連携は十分取れています。（利用者の方は、申し出れば通常と同様にカウンターで受け取れるようになっている。）

学校との連携では、書籍の貸し出しや小学校からの図書館見学の受け入れを行っています。子どもたちは、学校の図書館にはない器機に触れたり、蔵書の多さに驚いたり、興味津々で熱心に見学してくれています。また、学校司書との連携、交流については十分とは言えない面があるので、来年度は一歩踏み込んだ形で行っていきたいと考えています。

運営の関係では図書館協議会を設置し、年に２回、会議を開催しています。協議会には有識者、中学校・高等学校・ＰＴＡ、幼児教育関係者、お話サークルの方々等、８名の委員で構成しています。その中では、現状の運営状況を説明したり、課題について掲示し、様々な角度からご意見をいただき、日々の図書館運営に活かしています。

これからの計画について

今、子どもたちの「読書離れ」が、湯浅町だけでなく全国的に問題となっています。

そこで、昨年10月に児童文学作家の梨屋アリエ氏を講師としてお招きし、「本のトビラは未来への扉」と題して、主に中・高校生を対象とした講演会を開催しました。今年度についても、児童・生徒の皆さんにとって、より興味の持てる内容をテーマとして実施する方向で進めています。

「ブックトーク」については、今年度２回実施しました。図書館職員が担当し、「宇宙」「クリスマス」に関係した本を用いて小学生を対象に行いました。「ブックトーク」というのは、テーマを立てて、一定の時間内に何冊かの本を複数の聞き手に紹介する手法のことをいいます。その本の内容に関するエピソードを紹介しながら、子どもたちを本の世界にいざなっていく、つまり、参加した子どもたちに本の面白さを伝える、読みたいという気持ちを起させることをねらいとしています。私も参加したのですが、子どもたちは興味津々、目を輝かせて聴き入っていました。

今後については、児童・生徒の皆さんに読書の楽しさを知ってもらうために、図書館まつり（フェスティバル）的な行事を実施していきたいと思っています。ただ単に講演会を開催するのではなく、「ブックトーク」や「おはなし会」など読書に関係した内容のものや、工作教室・色えんぴつ画・おもしろ実験室など、子どもたちが楽しめるイベントも入れながら行うのもいいのかなと考えています。

また、書籍の充実はもちろんのことですが、情報発信を積極的に進めて行きたいと思っています。現在は、町や社会福祉協議会が発行している「広報誌」の紙面を借りて、主に新刊書などの情報を紹介していますが、もっと内容を広め、深めた「図書館だより」等の発行を通して、一人でも多くの方に足を運んでいただけるような「えき蔵図書館」をＰＲしていきたいと考えています。今後とも職員一同、より研鑽を深め、力を合わせて「魅力ある図書館づくり」を目指して取り組んでいきたいと思います。

大塔村の合併検証

どうすれば地域の価値を取り戻せるか、その議論が今必要な時

田辺市の合併懇談会、第４回目、２月21日田辺市鮎川で行いました。大塔から正垣泰比古さん、正垣央子さん、前川さん、森田さん、伊谷さん、谷本さん、研究所から九鬼、柳田、阪辻、大前が参加しました。

大塔村は、１９５６年昭和の合併で、三川村、冨里村、鮎川村が合併して生まれ、名前は、後醍醐天皇の王子、大塔宮護良親王が都から落ちのびる際に立ち寄ったという故事から付けたとの事でした。

懇談会の様子

合併から20年、行政・地域の変貌は

大前：大塔村と田辺市の合併後18年たって今更ですが、地域からみて今回の合併はどうでしたか。

正垣（泰）：捉え方はいろいろだと思うのですが、僕は合併時には上富田町民で、上富田町は合併しなくて良かったと思いました。田辺市の合併は、最初１市10町村での広大な合併案が出されて、最終的に１市４町村になった。それでも広大すぎると思い、合併してはならないと僕は思いました。でも元へ戻せという運動に取り組んだことはなくて、どうすれば要求実現を勝ち取るかという、そんな運動をいろいろやってきました。

大塔村でも、地域的な差があって、ここ鮎川と比べて、旧三川村や旧富里村は極端に過疎が進みました。そういう傾向は以前からですが合併で拍車がかかったという感じがします。森田さんは当事者として複雑な思いがあるかと思うけど。

森田：合併はメリット、デメリットがあったと思います。例えば道路の改修でも、合併前は、三川、富里地域にはそれぞれの道路改修促進会があって、地域の運動で県なり国に働きかけて、それなりに道を改良してきました。今もまだ、狭い道があります。今は地域の運動もなく良くなるのは難しいと思います。一方良かったと思うのは、大きな災害があったときには、体制がとれる。大塔村のときは職員70人程で、全て対応しなければならなかったのが、合併後は田辺市から応援に来てくれるので、その辺は良かったと思っています。

正垣（泰）：２０１１年９月に紀伊半島大水害があって、合併の良い面と悪い面の両方を実感しました。僕は本宮に行きましたが、熊野川が大氾濫して、一面水浸しで陸の孤島状態。何から手を付けていいか分からない、役場もおろおろしているような状況でした。でも、そのあと復旧作業が始まると、行政や消防も広域で助け合ってどんどんやる。そういうのを見てすごい力だと思った瞬間がありました。

大塔で働く職員は、どう変わりましたか。

森田：合併前の職員はほぼ大塔村の中で採用していました。合併後20年近くたって、皆退職し、大塔村地域の職員は少なくなっています。住民からしても、行政局に入りにくい、そういうのがあるようです。

伊谷：合併前は和歌山市だったので比較はできないですが、行政が遠くに感じる。私は保健師だったので、何かあったら役所にという事で動くのですが、今言っていたように、大塔出身の人だと、窓口で、ちゃっちゃと言ってくれるし聞きやすい。だけど、知らない人だったら、対応は良いですが、よそ行きの言葉でちょっと敬語になる。地区名を言っても分からない人がいて、思わず知った顔を探したりします。でも現実的には困まったり、田辺の本庁へ行く必要もなく、ほとんど行政局で対応してもらえています。

大前：行政局の職員さんは今どれぐらいおられるのですか。

森田：行政局の職員は30人ぐらい。それと、田辺市林業局がここに置かれていて、そこの職員を入れたら旧大塔村の職員よりちょっと少ない位です。でも今度、新庁舎ができたら、新庁舎に行くのかな。

正垣（泰）：僕は日常的にいろんな相談を受けたりして、役所に通う方ですが、田辺の本庁と鮎川に行政局、それに昭和の合併時の支所が連絡所として富里や三川にある。それでも、移動手段がない人は、不便だと思う。支所での業務も限られているし、行政局が近い鮎川ならそれは感

じないと思うけど。

切実な公共交通充実を田辺全体の運動にしたい

正垣（央）：私は35年位、上富田町に住んでいて、２００８年に夫の祖父母が居た冨里に来ました。当時は人もそれなりにいて、おばあちゃんたちも、大変だと聞いたこともなく、車を持っている人が病院に連れていってくれたり助け合っていました。でもこの20年、だんだん空き家が増えて、本当にすごいスピードで人がいなくなりました。近所のおばあちゃんの紀南病院への月１回の通院は、住民バスを予約して、少し離れた停留所で朝６時ごろから待って７時前出発で鮎川まで行き、路線バスに乗り換えて、田辺駅で又乗り換えて紀南病院に行く。住民バスは２００円やけど、総額では２００円位要る。田辺へ出て買い物したくてもお金も時間もかかり大変です。上富田と比べてしまう。コミュニティバスが頻繁に通って、病院もスーパーもいっぱいある。高齢になると住む所でこんなに違いがあるのかと思ってしまう。

田辺市役所冨里連絡所と冨里診療所

住民バスのようなものが充実して、朝早くから待たなくて、お金も安心というようなものが出来ればいいと思う。龍神でも要望が出ていると聞きますが、４町村の実態はみんなそうなのだから、合併すれば周辺部で、こうゆう事が起こると予想できたのに、何か冷たいなと思ってしまいます。

正垣（泰）：交通の不便さは、富里村で生まれ育ってきた時からでした。それでもバスが走っていたのですが、自家用車が普及して、ＪＲバスがなくなり、中辺路へ行く明光と龍神バスだけになり１日13往復かです。

住民の要望は、田辺で一番大きい紀南病院へ直行で行ってほしいというものだった。田辺駅で乗り換えるのは不便だと言います。

伊谷：バスは、学校に合わせているので、朝と夕方はあるが、昼頃が少ない。私は車がないので、田辺へバスで行くと、行きで待ち、帰りもまた１時間ぐらい待って帰ってくる。その事１つしかできない。それで、危ないと言われてもバイクで行っています。

正垣（泰）：交通の問題で一番何とかほしいと頼まれたのは、日曜日に孫が保育所で運動会があるので行ってやりたい。ところが住民バスが走らない。土日と年末年始は走らないということでした。それで市へ要望したのが10年ほど前。いまだに変わらない。

柳田：龍神の新婦人の方と話をして、彼女らが一番問題に思っているのが交通の問題。龍神で一生懸命運動をしても、龍神だけでは出来ないと言われて断られる。だから大塔や中辺路、本宮の人らとも一緒に、そういう問題を相談しながら田辺市に対して要求をしていかないと、龍神だけの運動ではうまくいかない。そこで、交通の問題について一緒に市に対して要望していくような、そういう機会をつくれたらと思います。

正垣（泰）：田辺市全体で、情報交換を始めていて、僕や伊谷さん、谷本さんらで、去年、新宮市熊野川町の視察に行ってきました。それで、非常に便利やというのを実感して、田辺でも走らせようと言い始めています。春頃になったらみんなの声を聞いていきたいと思っています。

九鬼：どこの地域が参加しているの。

正垣（泰）：「乗合タクシーを走らせる会」、田辺全体で連絡会的に作っていて、でもそれぞれの地域で、めいめいの運動になっています。会員というか、今のところ共産党の市議会議員さんが声をかけて、集まった感じで、まだ運動というよりも、各地の現状報告をしたという感じ。

伊谷：龍神はこんな事で困っているという報告を聞いたり、４町村以外の上秋津とか旧市内も度合いは違うけど高齢化は進んでいて、交通手段の問題では同じように困っている。

正垣（央）：去年の４月10日に、ビッグユーで「田辺市地域公共交通を考える会」で、第一交通の方を講師に勉強会をしました。実現しているところの話とか、田辺で実施するにはどんな問題があるとか、地域それぞれに実態が違うから、それを調べて、議員さんに頼んで質問してもらいましたが、その後進んでいません。

正垣（泰）：一番この辺で上富田が便利です。そこで４月から事前予約のデマンド型コミニティバスを、ほぼドアツードアになるのを走らせます。それでこの辺の状況も変わってくると思います。

柳田：大塔には病院とか診療所はあるのですか、そこから患者を迎えにきてくれたりする。

正垣（泰）：３つあるのですよ。鮎川診療所、三川診療所、富里診療所って、旧３村ごとに診療所があって、で、鮎川診療所は、白浜のはまゆう病院がやっている。

伊谷：奥はへき地診療所で、鮎川ははまゆう病院の診療所。鮎川診療所は、患者を送り迎えしてくれる。何曜日はどの地域か決まっているみたい。

過疎で、集落水道の維持も大変になって来た

正垣（泰）：僕は、この村から出て戻ったけど、三川、富里の過疎は極端にすごいなと思います。小学校の頃、小中学校の連合運動会なら三川の学校が主流。この前調べたら旧三川の人口は２００人ほど、富里が４００人ぐらいで、残りの千７、８００人が鮎川。昭和の合併時、三川３７００人、富里２４００人、鮎川２３００人の順だったのが今は完全に逆転して、鮎川だけが何とか集落の形が残っている感じがします。

僕らがうらやましいと思うのは水です。鮎川の人と話をしても水が出ないとか、水で困っている話題にならない。ところが富里へ行くと、水の話ばかり、簡易水道のところも部分的にあるけども、僕の所は、飲料水供給事業、行政で言われる「飲供」っていうやつです。谷の小さなダムから水を引っ張って、村の高いところにタンクを置いて、供給するやり方で、大水のときは濁るし、冬場は凍るし、いっぱい不便があります。

柳田：上水道の話はないのですか。

正垣（泰）：ないです。富里は1か所だけが簡易水道です。他は恐らく行政がやろうとしたら、費用対効果でやれないとなって、地域で努力してください。ただし、できるだけ援助はします、となったと思うのです。ところが高齢化して、山へ登れないとか、水源まで行けないとか、そういう深刻な問題が出てきて、僕の所も、水源を変えて1つにまとめようと作業中なのです。

冨里平瀬集落水道のタンク

柳田：会計や水道代なんかは、それぞれの集落で全部処理をしている。

正垣（泰）：設置時は補助事業でやりますが、後は自分らで管理する。集金をして、自分らで掃除をしています。紀伊半島の山の中では、そういうところが幾つも残されていると思います。

伊谷：うちの富里の実家もそうで、上にタンクあって、何かあったら水の具合を見に上がって、それでごみやらを掃除する。

柳田：みなべでも、山奥の1軒家に水道を引くのは、自分できばってという話になるが、集落での水道は行政の責任やと思う、命に関わる問題や、まあいうたら。

九鬼：そういうのを、取り上げる議員さんは、ここの地域にはいないの。

正垣（泰）：市議会議員も、大塔地域に根を張った議員さんは1人です。また、それが問題だと感じる人が少ないのかも、住民も行政の責任だと思うと言うけども、そうでなければ自助努力で済ましてしまう。道と水はライフラインで、この村では一番大事な問題です。

　また、以前はお店があって、大体村で生活ができたけど、今はここで生活必需品を買いそろえることはできない。

店がなくなり、林業や観光もうまくいかない

前川：以前は店が5、6軒あったけど、今は2軒、大概下の方に買いに行くな。

伊谷：上富田が一番近いし、大きなスーパーがいっぱいあるから。

正垣（泰）：お店の問題が、農協が衰えるのと一緒になっている。この村でも農協の役割が大きかった。燃料、食料関係とか肥料だとか、すべて総合的に支えたけど、周辺の購買力がなくなって、農協の財政が極端に悪くなっているのでは…。

伊谷：農協は県で8つある地域の農協を県1つにする方向が出ています。それぞれの農協で意見のすり合わせが行われて、昨日も運営委員会があって、三川、富里、鮎川の運営員会も1つになります。組織が大きくなって声が届きにくくなると心配しています。合併は2年後ですが、あちこちのATMや給油所、お店がなくなったりして、その代わりに車で販売や、ATM車を回すのです。対応はしてくれるのですが、いろんな面から不便になっていくようです。

正垣（央）：富里は、昨年給油所とそこのスーパーがなくなりました。おじいちゃんがバイクでパンを買いに来て、それが楽しみだと言っていたのが、それもなくなりました。

　JAの移動販売車の「うめっぴ」を待って、それで買物をします。火曜日に近所に駐まって、金曜日は足の不自由なおばあちゃんの家に駐まるというように、小さい集落でも週に2回来ています。

柳田：それもまた採算が合わんようになったら、廃止というやつが出てくる。

伊谷：運営委員会では、そこばっかりです。当たり前ですが、公的なお金と違うから、運営できなくなったらもう当然のごとく閉められます。

正垣（央）：93円ぐらいで上富田の農協Aコープで売っている豆腐が、「うめっぴ」では110円。それを何とかしてほしいと、区長さんが掛け合ってくれたけど、やっぱり駄目だと言われた。

伊谷：1品につき幾らか加算されているのです。

前川：これ悪循環や、農協のAコープでも、お客さんがいないから品物を入れない。それで、買うものがないからお客さんが来ない。悪循環。それでみんな下へ下へ行ってしまう。

伊谷：田辺市のいろんな会議で感じるのは、仕方がないが行政は人口の多い所を軸に考える。女性会などで話が出るのは、合併してお金を使ったのに、良くなったのは田辺市内の学校などやと、過疎地は人も少なく地域性があって、同じような要求でも1つにならず、旧市内の要求の方が先に通るという思いを、私らは持っている。

大前：この前、中辺路へ行った時に、林業をもっと何とかならないかと、真砂市長さんも森林環境税が、日本で4番目の額をもらう自治体で、これから活用したいという話もしていましたが、林業はどうですか。

正垣（泰）：山林は田辺の地主の山が多く、地元の地主の山は少ない。50年生の木がいっぱいあるけど、手入れする者がなく、放置された杉林やヒノキ林が残されています。また、今の森林伐採が、災害をおこす様な仕方だと思うのです。山に作業道を付けて機械を入れて皆伐するやり方で、雨が降ると、片方の谷からきれいな水が、もう片方からは泥水が流れて合流する恐ろしいような状態になっています。こういうやり方では、川を幾ら

浚渫しても次々と土砂が流れ込む事態になると心配しています。

柳田：農業は、梅とか蜜柑とかをつくって、専業でやっている人もいますか。

正垣（泰）：梅で専業農家の方は何軒かいますが、それでも後継者はいないようです。

森田：今、山を持っていても、先ほどの田辺の地主でも、山の値打ちがない、二束三文です。手入れや間伐は個人ではできない。僕ら職員当時、共同で山を購入しました。７町か８町の山ですが、一人頭１１０万円ぐらい出したのです。それを何年かして、値打ちがないと売ったのです。３分の１になっていました。とてもやないけど山を持って林業は考えられません。

大塔中学校と鮎川小学校、手前にあゆかわ保育園が並ぶ

正垣（泰）：大塔は、ほかの３町に比べると、観光地がない。本宮、中辺路、龍神それぞれに温泉があったり古道があったりする。

旧大塔村時代には観光に幾つか手を打ちました。例えば、合川ダムの周辺でボートを浮かべて観光地にするとか、キャンプ場をつくって、その周辺へ人を寄せるとか、いろいろやったけれども成功しなかった。この間、人を集められたのは、障害者や高齢者の施設をつくって、そこで働く人と関係者を集めたくらい、活性化につながったのはそれくらいかな。

柳田：百間谷渓谷なんかは観光地になってないの。

正垣（泰）：なっていたけどね、２０１１年の災害で壊滅した。

伊谷：潰れてしまい、カモシカもよそに預かってもらったりしたようです。

森田：これからの将来的な展望というのは、僕は今考えられない。

この村の未来を取り戻すために

前川：鮎川の魅力は、他と比べて優れたとこは何１つないけど、学校は保育園、小学校、中学校って並んであるさかい、これが最大の魅力やと思う。

正垣（泰）：４年、５年前に田辺市会議員選挙に向けてアンケート取ったことがあるのです。集約したら、鮎川に住みたいと何人かが書かれていて、今言われた話、子育てしやすい。保育所、小学校も中学校もそろっているから、ここ以外ない、奥へ行ったらないのですよ。

森田：市の職員さんの異動で、どこの行政局に行きたいかというと、大塔の行政局がトップなのです。市街から遠くないし、こじんまりして仕事がやりやすい。

正垣（央）：以前、市議会を傍聴したときに、若い議員さんが、田辺市内の幼稚園の入園者が２人だったと、これは危機的なことで、市長はどう考えますかと質問していた。これだけ子どもが減っていくと、もっと幼稚園にも対策をしていかないと潰れていくと言って。

旧田辺市内の減少の問題もあるけれども、合併した４町村の人口減少は深刻さのレベルが違う、さっきの話のように、命に関わるような問題になっているわけ。議会傍聴に何回か行きましたが、議会がその深刻な実態を反映した論議にならないのです。ああ、広すぎるのだとすごく思いました。やっぱり、今日みたいな地域のことを取り上げないと市政に届かない。４町村の議員さんに、こんな意見を聞いて、乗合タクシーのこととか、具体的に持って行ってもらいたいと試行錯誤しています。こんな広い市の運営を、市長さんに頑張ってもらいたいなといつも思っています。

九鬼：自治体問題研究所は、合併の検証を、広域合併だった田辺が一番特徴的だと考えました。本宮、龍神、中辺路で集まっていただいて、こんな会を持ってきて、話の中で深刻な状況がいろいろ出てきました。検証だけで終われない状況があり、少しでも、地域の皆さんが元気になり前をむける取り組みができないかと考えています。

昨日は龍神で、前の懇談会で出された要望とかの返事を伝えてきました。龍神の女性たちも頑張っているけども、それはあんたらだけやと捉えられていて、龍神全体が同じ思いを持って、オール龍神の声にする。どこまで出来るか分かりませんが、それをシンポジウムなどの形でできないかと準備段階の話をさせてもらいました。商工会で頑張っている人たちとかも含めて、龍神で困っていること、また、龍神の将来に向けて語るようなことが出来ないか、そういう集会を計画しています。催しができたら大塔からも見にいってもらいたいと思います。龍神だけではなく、旧町村全体の声にするきっかけづくりをしていきたいと思っているのです。

正垣（泰）：合併が直接の引き金であれ、そうでなくても、ここ数十年の地域の衰え方は、みなそれぞれ経験者やから、なんぼでも語れるけど、その現実を踏まえて、この村の未来をどうするかとなれば、頭を抱えるというのが現状だと思うのです。そこが見えてくる取り組みを１つでも知りたいというのが率直な思いです。田辺市は自治体としては大きくなったけど、日常、生活をするのはこの村で、この村が将来どうなっていけばいいのか、どうすれば価値を取り戻せるのか。この地域でその議論が今欲しいと思います。よそから注入できるものじゃない。でもさっきのことはヒントやと思ったのです。保育所、小学校、中学校、こういう子育ての施設がきちんとあるところにまだ人は残る。そんなに思います。

大前：本日はお忙しい中、ありがとうございました。みなさんにも力を借りて、地域を良くしようという思いを広げる取り組みを進めますので、よろしくお願いします。

県下各地から⑥

上富田町役場での「仕事」をおえて

淑徳大学地域創生学部教授　中島正博

元和歌山大学経済学部准教授で、一時研究所の副理事長をしていた中島氏が、和歌山を離れると聞いて、投稿をお願いしました。

中島正博さん

人口増の上富田町で、なぜ「地方創生」？

私が和歌山大学を離職し、上富田町職員になったのは2018年のことだが、その前3年間は、週3日は和歌山大学で授業など大学の仕事を行い、週2日間は上富田町役場に机と椅子をいただいて、地方創生のお手伝いをしていた。

上富田町との出会いについては、拙著『「競争の時代」の国・地方財政関係論』（2019年、自治体研究社）の「あとがき」に触れている。少し長いが引用しよう。

「2014年秋、大学人、民間コンサルタント、国家公務員が市町村の首長の補佐役として出向し、地方創生関連業務を支援する『地方創生人材支援制度』がはじまった。同年暮もおしせまった頃、和歌山県内のいくつかの市町村から受け入れたいという応募があることを知った。その一つに、上富田町があった。

和歌山県全体は昭和末期から人口減少しているなか、上富田町は人口が増加していることがまず印象的だった。さらに調べてみると、平成年代に企業立地がすすみ、ニュータウン型の住宅建設の結果としての社会増が人口増の原因であることがわかった。したがって、今は人口増を謳歌しているものの、いったん人口減少局面になれば、人口減少と高齢化が急速に進むことが予想された。ある意味では、首都圏や地方中枢都市周辺にも似た、これから日本が抱えるであろう問題が上富田町にあるのである」。

少し解説する。人口ピラミッドを書いてみればわかるが、和歌山県内の町村では、地元に残っているのは団塊の世代の上の世代で、そこが一番厚いことが多い。しかし人口で見れば、そうした地域に住んでいる人は、和歌山県では数万人、日本全体でも数百万人に過ぎない。

一方、県内の市役所とともに上富田町では、一番厚い層は団塊の世代や「団塊ジュニア」である。団塊ジュニア世代がいる地域では、なんとか団塊の世代の高齢期を支えることができるのである。団塊の世代は団塊ジュニアによって支えたが、団塊ジュニアの高齢期は誰が支えるのか。そして、職場でもPTAでも、現役世代が少しずつ減少していく。これは、この先の約30年、都市を中心とする地域、多くの人口が住んでいる地域で見舞われる問題なのである。

過疎になやむ農山漁村で、「稼ぐ力」といって直売所づくりや6次産業化を頑張り、人が戻ってくることは大切なことだが、それで日本全体の構図は、おそらく変わらない。東京は、都市改造やオリンピックで若い人を次から次へ呼び込むことで、団塊ジュニアを支えるつもりだろう。しかし、東京に若い人を送り込んでしまった地方の中心都市や衛星都市で、約1億人が住んでいる地域で何ができるか。それこそが地方創生だろう、というのが私の思いである。

ももクロコンサートを誘致して

かつて農業や小売業の商店を継ごうとした自分の子どもを怒鳴り散らして止めた親の話はよく聞いた。「こんな仕事に意味がない」親がそう言ってしまっていたのだ。同じことが、地域にもある。「このまちには何もない。東京でも大阪でも、外に出ていったほうがいい」。小田切徳美教授（明治大学）は「誇りの空洞化」と表現したが、そう大人が言ってしまっている。

ももクロの舞台での筆者（左から２人目）

ももいろクローバーZというアイドルグループがいる。東日本大震災の復興過程と時を同じくして、ファンも拡大していった。それは偶然ではない。あるファンがいうには「頑張れって応援するのが普通のアイドルだとすると、ももクロは自分で頑張って見せる」と。テレビにそんなに出るわけではないが、紅白歌合戦に出場し、国立競技場を埋めた彼女らが頑張っている姿が、震災だけではなく、失われた20年から立ち上がろうとする人を勇気づけているのだろう。

そのももクロは、5年前から、都会のドームやスタジアムでやっていた数万人規模の春のコンサートを「自治体の皆さん、誘致して下さい」と呼びかけた（コンサート中に行われたのだが、その場・埼玉県富士見市の運動広場にいた私は武者震いをした）。広場や運動公園に仮設のステージを組み、1万人程度のコンサートをする。上富田町は、ちょうど町制施行60周年だったので、記念行事として誘致をする手を挙げた。結果は落選だったが、ももクロの呼びかけに呼応した自治体が上富田町以外に20ほどあったらしくて我が意を得たと思った。その後、数百人規模のコンサートでよければ、みなさんのところに行きますよ、という案内を事務所からいただいた。

コロナ禍での延期をへて、それは昨年10月に実現した。なぜか私が取材を受けた。「夢見て頑張れば、ももクロだって来てくれる。大人が頑張る姿を見せることで若者も『なにもない田舎』と諦めず、ふるさとに愛着や誇りをもってくれると思う」（読売新聞、2022年10月31日）。

私自身、関東に活動拠点を移し、淑徳大学という大学の地域創生学部の教員となる。地方自治行財政や地域創生は引き続き研究と教育のテーマである。頑張る人を勇気づけ、励ましていく、そんな第二の人生と変わらない人生が、まだまだ続く。